

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 67

2012年11月

Special to the Newsletter

ポルトガルの「情熱」とブラジルの「跳躍」 —大西洋を結ぶ糸—

住田 育法

1 はじめに—『沈黙』から46年

ローマ教会に1つの報告がもたらされた。ポルトガルのイエズス会が日本に派遣していたクリストヴァン・フェレイラ神父が長崎で「穴吊り」の拷問をうけ、棄教を誓ったというのである、という話からはじまる遠藤周作の『沈黙』が46年前に新潮社より刊行された。作家遠藤は翌1967年に招待されてポルトガルを訪問している。キリスト教徒である遠藤は、アジアの彼方の日本に、なぜ、ポルトガルの若者は命をかけてまでやってきたのか、その理由を知りたいと述べている。スペインがポルトガルを併合していた同君連合時代のことである。日本では、太守秀吉がキリスト教の迫害をはじめ、徳川将軍がすべてのキリスト教聖職者を海外に追放した。一方、ブラジルでは、ポルトガルのキリスト教徒による植民地建設が進められていった。

2 ブラジルに向かったレコンキスタ

本年2012年、夏季休暇を利用して研究のためブラジルに滞在した。サンパウロ、ブラジリア、リオデジャネイロ（以下、リオと略す）と移動するブラジルでの調査を終えて、8月26日の夜リオからポルトに飛び、ヨーロッパ経由の帰国を利用して、翌27日から9月初旬まで、ポルトガル北部の教会や修道院のいくつかを訪問した。ポルトから高速道路を利用して、ガリシアのサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂のミサにも参列した。各地の重厚な建造物に身を置き、キリスト教徒の信仰心に畏敬の念を抱く。日本人異教徒の私には『沈黙』時代の日本人青年の目にその壮麗な風景がどのように映ったのかが最大の関心事となった。ヨーロッパの新世界ブラジルへの展開は、過去のポルトガル北部から南部に向かうレコンキスタの「情熱」にはじまる。イスラム教徒追撃の歴史は大航海時代に大西洋を越えてブラジルに達した。このポルトガルのキリスト教徒たちが、新世界の空間を自らの土地として所有することになる。植民地ブラジルにおける世襲カピタニア制と未耕地の無償配分制セズマリアの導入である。



ポルトガルのアルコバッサ修道院
2012年9月2日撮影

3 ブラジルの大土地所有制

セズマリアが今日の大土地所有制の契機となり、ポルトガルに属した世界分割の地アフリカからの歴大な黒人奴隷の輸入が、ブラジルの黒人奴隷制を堅固にし、多人種混淆のブラジル社会誕生の背景となった。1494年にスペインとポルトガルが決めた世界分割をフランスなどが認めなかったため、ポ

ルトガル王室は 1500 年に発見したブラジルのカピタニア制による実効支配を決断した。世界分割線のポルトガルに属する広大な帯状の土地を 1534 年から 36 年にかけて、15 の世襲カピタニアに分割し、領主にあたるドナタリオに分与した。所領カピタニアを自力で開発し防衛することがドナタリオに義務づけられ、土地とともに裁判権が譲渡された。世襲を認められたが、土地の用益権のみで、領内の土地はセズマリアとしてキリスト教徒である入植者に無料分譲された。12 人のドナタリオのうち、成功したのは後にサンパウロとなる南のサン・ヴィセンテと北東部のペルナンブコのみであり、分譲地セズマリアがブラジルの大土地所有制に繋がることになる。

4 本国の運命と植民地の運命

世界史の展開のなかで、本国ポルトガルの運命はときにそのまま植民地ブラジルの運命となる。その顕著な例は 1580 年から 1640 年にかけて起こった。ポルトガル・スペイン同君連合時代に、植民地のブラジルもスペイン領となり、本国と同じくスペインの敵国と対立することになった。北東部では当時、スペインからの独立運動を戦っていたオランダが、投資ならびに市場面でブラジルの砂糖経済に深く関わっていた。砂糖の権益を守るためにオランダはブラジルを攻撃し、1637 年から 1644 年まで、ペルナンブコにオランダの植民地を築く。ブラジル人はポルトガル人とともによく戦い、1654 年にオランダ人をペルナンブコから撤収させた。

1640 年に本国ポルトガルがスペインからの再独立を果たしたとき、当時のヨーロッパの 2 大勢力イギリスとフランスが対立する狭間で、ポルトガルはイギリスに接近し、本国が植民地のブラジルを巻き込んでイギリス経済に従属するにいたった。ポルトガルは植民地の安泰を求め、イギリスはその代償に植民地ブラジルでの通商上の特権を得たのである。1703 年のよく知られたメシュエン条約の締結は、イギリスへの経済的従属の追認を意味した。このときブラジルは空前の金ブームを迎えるが、この金でポルトガルはイギリスに対する貿易の赤字を埋め合わせた。金の積出港として、1763 年に植民地ブラジルの主都がサルヴァドールからリオに遷される。

5 拡散型のブラジル空間

広大なブラジル空間は、平原の少ない高地であり、さらに、北東部のバイア州サルヴァドールから南部のリオグランデス州のポルトアレグレまでの大西洋岸には、海岸山脈が巨大な壁となってそびえ海に向けて急な斜面を形成している。「国家統一の川」と称されたサンフランシスコ川がミナスジェライス州の中央部に源をもち、北東部の内陸部地帯を海岸に平行して北または北東に流れ、バイア州北部で大西洋に注いでいる。アマゾン川支流のトカンティンス川、アラグアイア川、シンダー川、タパジós川などすべて中央部に源を発して北へ向けて流れ、アマゾン川本流に合流する。南に流れるラプラタ川に合流するパラナ川の多くの支流もまた中央部と南東部に源を発している。河川が主要な交通路であった植民地時代には、特定の地域に人が集まることなく、果てしなく拡散することとなった。こうした拡散型の地形の自然環境は、広大な国土の占有に寄与したものの、人がある一点に集中して生活することを妨げてきた。特に、植民地時代の開発の歴史を見ると、ヨーロッパ人による内陸部への計画的で継続性のある開発を困難にさせたのである。したがって、都市は大西洋に面した海岸地帯に展開することになった。その 1 つが旧都リスボンをモデルに新世界に誕生した、瀟洒な植民地都市リオである。

6 不思議な都リオの誕生

2 大国フランスとイギリスが対立を深める中、1806 年、フランス皇帝ナポレオン 1 世が大陸封鎖令を発してポルトガルへ軍を進めたため、小国ポルトガルの王室はイギリス海軍に守られて、ブラジルへ逃走した。1808 年にブラジルに到着し、独立宣言の前からリオは、文化、政治、経済の中心地としての基盤を整えた。1822 年にブラガンサ王朝の摂政皇太子が独立を宣言し、ポルトガルは、自らの王室の移転を契機としたブラジルの独立によって、本国を支えてきた植民地を失い、他方ブラジルは、

ポルトガルの伝統を完全に否定するのではなく、王国を帝国に変えてポルトガル様式をブラジル風に作りかえながら、新世界における発展を目指した。ポルトガルの「情熱」が消えることなく続くことになったのである。

1872年のブラジル総人口993万人のうち、奴隷が151万人と国民の15%を占めていた。奴隷を使ってコーヒー栽培をおこなっていたリオ県に29万3千人、ミナスジェライス県に37万人と、ブラジル全体の約半数が集中しており、首都リオにも4万人9千人の奴隷が住んでいた。摂政皇女イザベルが1888年に全奴隷解放法に署名し、ブラジルは古い社会から新しい社会への変革期を迎えた。しかしこの解放は、奴隷所有者には無償であり、奴隷には援助なき自由の供与であった。そのため、生活の支援のないまま、多数の解放奴隷が首都に向かうことになった。ちょうどその9年後の1897年、北東部のバイア奥地カヌードスで反乱者の大量殺戮という悲劇でカヌードス戦争が終わり、反乱者の妻子と政府軍の兵士らがりオに移動し、丘に住みはじめた。つまり、行き場を失った解放奴隷や戦争に参加した軍人、戦争の犠牲により夫や父を失った女や子供らが、首都リオに生活の場を求めて移動したのである。

7 おわりに—近代都市リオとブラジルの今

20世紀初頭の1902年に、ペレイラ・パソス市長による首都リオの都市改造がはじまる。フランスのパリを模して、リオの街路、港湾設備、さらに公共の建造物の改良と整備がはじまった。毎年夏に多くの人命を奪っていた黄熱病も、1906年に、細菌学者であり市の公衆衛生局長であったオズワルド・クルスの努力によって撲滅された。1908年には、ブラジル開港100周年を祝って大博覧会が開催された。オペラやコンサートの公演のための豪華な市立劇場も、あらゆる建築資材をヨーロッパから輸入して建築に4年をかけて、1909年に完成した。これはファヴェーラ誕生を意味する、新しい世紀における新しいリオの出現であった。近代的な空間から弾き出された低所得者層が丘の上や郊外の空き地に住居を建て、共同体を形成しはじめた。リオの都市開発は1922年のブラジル独立100周年を記念する展覧会場建設のころ頂点に達した。独立100周年を記念してラジオ放送が開始され、リオのキリスト像の建立も決まり、1931年に完成した。

ファヴェーラに代表される貧しい地区と海岸の美しい裕福な地区が混在する新世界ブラジルの古都リオのコントラストを愛でたのは、かの地で没したオーストリアの文豪シュテファン・ツヴァイクであった。確かに、文学作品や映画、音楽などに登場するリオの都市空間の魅力ある風景は、憩いの空間として、リオ市民のみではなく、異国の訪問者をも積極的に受け入れてくれる。丘の斜面に展開するファヴェーラは、夜になると宝石を散りばめたような夜景を演出する。そして、真夏のカーニバルのときには、その住民が主役となって、華やかな民衆文化の祭典が繰り広げられる。



リオのコルコバードのキリスト像遠景と渡し船
2012年8月19日撮影

2012年、このリオの美しい景観が世界文化遺産に登録された。新興国 BRICS の中でも名目 GDP ランキング世界第6位の実力を誇るブラジルで、2014年にはサッカーのW杯、2016年にはリオで国家と民族のスポーツの祭典夏季オリンピックが開催される。ポルトガルの「情熱」が植民地時代の過去、「大土地所有制」や「黒人奴隷制度」という負の仕組みを生んだ。しかし今、大西洋を越えたその「情熱」の糸が、南米のポルトガル語圏の「跳躍」を確かなものとしはじめている。まさに、シュテファン・ツヴァイクが「未来の国」と呼んだブラジルの未来形が現在形になろうとしている。

(京都外国語大学教授・京都ラテンアメリカ研究所研究員)

文学の中のアメリカ生活誌 (58)

新井 正一郎

New Mexico (ニューメキシコ州) 伝説の「シボラの7つの黄金都市」を求めて、1540年にニュースペイン(メキシコ)への探検を行ったコロナド隊が踏査しなかった所を訪れた後年のスペイン人探検家イバラは、1562年のメキシコの副王宛の報告書の中で、ヌエボ・メヒコ(スペイン語 Nuevo México 「新しいメキシコの土地」)を見つけたと書いた。この表現から New Mexico という単語が生まれた。コロナド隊の探検から60年あまり後、スペイン国王からニューメキシコの植民地建設の特許状を受けたメキシコの銀山所有者の息子オニャーテは、多くの兵士と聖職者を伴い、プエブロ(スペイン語 Pueblo 「集落」)に住む先住民(プエブロ族)が支配するリオ・グランデ川上流域のサン・ファンに入ると、この地はスペイン王の所領であると宣言した。後にサン・ガブリエルと呼ばれるヨーロッパ人が築いた町としては北米で2番目に古いサン・ファンは、1609年にオニャーテの次の総督がサンタ・フェを創設するまでニューメキシコの首府であった。

新大陸のスペインの植民地経営事業は搾取を特徴としていた。王室はメキシコに置いていた副王庁が金を求めて、本国であるスペインから渡航してきた有力なスペイン人から多くの富を吸い上げることができるよう、エンコミエンダ(スペイン語 encomienda 「委託」)という封建的な制度を導入した。これはスペイン人植民者に、先住民から掠めた広大な土地とそこに住む先住民を鉱山や農場における労働力の供給源として使用する権利を許可するためのものだった。メキシコのスペイン移住者の場合と同様、多くの富を得たサンタ・フェの入植者も、その代償としてプエブロ族のキリスト教化と賃金義務を負った。しかし、彼等の中には先住民に賃金を支払わなかっただけでなく、彼等を奴隷化した者もいた。先住民に加えられたひどい状態に心を痛め、エンコミエンダ制の廃止運動に力を尽くした中心的な聖職者が、ラス・カサスだ。彼の長年の努力は実をむすび、スペイン政府は1514年に「インディアス新法」という名で知られるプエブロ族に対する苛酷な扱いを禁ずる法律を制定、この結果、先住民は国王の僕とみなされた。勿論スペインの支配下に置かれることに強い不満を抱き、スペイン人を襲うプエブロ族もいた。こうした「プエブロ族の叛乱」が1670年代の早い時期から1695年まで、何回かにわたってサンタ・フェ付近で起こった。1680年にはポベの率いるプエブロ族がサンタ・フェのスペイン人植民者を追い出し、その地を占領した。もっとも1690年、スペイン軍は彼等を打ち負かしたものの、アメリカに進出してきたフランス人への備えも影響して、スペインがニューメキシコを再度支配するのに12年近くの歳月を要した。18世紀に本格的に動きだしたサンタ・フェの再建事業の中で重要なものとして際立つのは、物質、人間の流れの要である公道の改良であった。ミズーリーのインデペンデンスとサンタ・フェを結ぶサンタ・フェ道路は、カミノ・レアル(スペイン語 Camino Real 「王の道」)と名づけられた公道であった。公道といっても荒野のなかに続く切り株だらけの危険に満ちたものであった。メキシコがスペインから独立した(1821年)直後に完成した公道整備に、通商局の独占物であった交易を、誰もが自由に行えるようになったことが加わり、アメリカの商人たちはミズーリーのビジネスマン、W・ベックネルの例にならって、サンタ・フェまで荷馬車で行き、積荷を売ってかなりの利益をあげることができるようになった。メキシコ定住のアメリカ人交易商人も現われたため、1820年代のニューメキシコは通商的には、合衆国の領土とされ

ていた。道路の整備に伴い、サンタ・フェは都市化を早めていったが、メキシコ戦争の結果、ニューメキシコは勝利した合衆国に譲渡された。

ニューメキシコに強く惹かれた作家にイギリス人のD・H・ロレンスがいる。人と人、人と自然との生きた繋がりが碎けてしまった機械文明の国イギリスを「死んだに等しい」とぼろぼろに書いたロレンスにとっては、早くからアメリカは「血の存在」（生命の焰、万物を抱擁する真の自己）をよびもどしてくれる「地霊」が宿る希望の象徴であった。1915年の手紙の中で「私はアメリカと会合しなければなりません。そこでは荒々しいが、生き生きとした生命が根元から生じてくると思っています」と書いている。彼にとって、白人（意識）が「黒いデーモン」ときめつけたアメリカ原住民の「血に宿る意識」（生命）を生き返らせ、活気づける文学をつくりだすことと、アメリカの何処かに「ラーナーニム」という人間の存在が根ざす、いわば臍の緒のつながっている世界（理想郷）を創設することとは、双生児であった。彼は生命力が沈滞したイギリスから遠ざかろうと、自己の道（徘徊派）を直進した。1912年の時のドイツ、イタリアへの逃亡の旅をはじめとして、年々一度は異郷を放浪しなければ気がすまぬようになった。1922年の「ラーナーニム」探求の旅の足跡を辿ると、イタリア、オーストラリア、アメリカに及んでいる。アメリカに渡った彼と妻の2人が、裕福な東部出身の女性の招きで、サンタ・フェの北に位置するタオスというどこまでも突き抜けた光景の地に入ったのは、同年9月11日であった。この地で初めてそれまで求めてやまなかったもの、即ち荒廃衰弱した自らの精神を新たにしてくれる「土地の霊」を、瞬間的に感受したようだ。彼は「そこ（ニューメキシコ）は私を永続的に変えてしまった。（略）私は光耀く、誇らしげな朝の太陽がサンタ・フェの砂漠の上に高く昇るのを見た時、心の中の何かが静かに立っていた。私は注意してそれに耳を傾け始めた」と書いている。

ところが、ニューメキシコのメーサ（mesa「台地」を指すスペイン語）につくられていたアパッチ族の集落に入り込み、念願であった彼等の生活を実体験した彼が見つけたものは、白人以前のアメリカに脈々と生きつづけていたはずの「真の生命」が、接した褐色のアメリカ（インディアン）の中に存在しないことであった。この期を境に希望の地としてのアメリカという考え方は、彼の想像力から消える。その頃（1922年12月17日）の手紙には、「アメリカは全く空虚な無があるだけのようです。（略）私はヨーロッパと一体です」とある。彼のニューメキシコ滞在期間は2度の訪問を合わせても、僅か1年半位で終わりを告げた。それでも「ラーナーニム」の熱望を持つ彼は、翌年3月メキシコに向かい、その後ニューオーリンズ、サンタモニカなどを訪ね、結局はイギリスへの回帰を志向した。このように見れば、彼の人生と文学にとって重要なのは、アメリカへ赴いたことよりもそこを脱して、イギリスに向かい、その後も諸国とイギリスの間を歩き来たことだということが分かる。かくして現われてくるのは、第一次大戦後の個人に宿る本来の自己が奪われてしまっている故国イギリスへの批判と、個性が輝いていた頃のイギリスに対する誇りと、隠された両義的な心情に苦悶してまでも、「ラーナーニム」を希求している、作家としてのロレンスの姿である。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

【アメリカス学会定例研究会・発表要旨】

グローバル経済戦争を読み解く

森田 成男

法体系も含め、現状の国際経済戦争の土俵について考えよう。世界標準の独占禁止のルールは、米国では金融などが除外されている。米英の多国籍企業のほとんどが、タックスヘイブンを拠点にしており、全く国税を払っていない企業も存在する。1913年に連邦準備制度を創設した際に、背後で動いた金融業の徒党のことを「マネー・トラスト」と米国議会が名付けている。宋鴻兵（ソン・ホンビン）は『通貨戦争』で、政治と権力をにぎる強大な「マネー・トラスト」の、金融危機の背後にある根幹の構図を解き明かしている。

1. アメリカス世界と債務危機

1950年代後半、米国政府は、過度の集中を禁止していた反トラスト法の適用対象から、銀行を除外する。銀行の大型合併が、法的にすべて承認された。そして、1971年のドルの不換紙幣化（ニクソン・ショック）、1976年のIMF総会で、擬制の「変動相場制」が承認される。さらに1980年、カーター政権下で「銀行の規制撤廃と資金管理法」が成立した。その後、タックスヘイブンの基となるユーロダラー市場（ロンドンのシティ）の拡大など、今日の金融大動乱の舞台装置が準備された。債務の多くは変動金利となっており、金利が上昇すれば巨額の債務の返済コストは膨らむ。ついにメキシコが1983年8月にデフォルトを宣言する。その後、アルゼンチン、ブラジルなどが次々にデフォルトを起こしていった。すべてが米英の銀行の過剰融資のせいとはいえませんが、変動相場制や、FRBの急展開の高金利政策、カーター政権で成立した「天井なしの利息取立て法」と、南米諸国の債務危機との因果関係は否定しようがない。

2. 債務創造（借金押付け）による支配

FRBは国外の金融機関に直接融資することはできない。だが、スワップ協定に基づき、他の中央銀行の通貨とドルをスワップしてドル資金を供給できる。これがFRBやIMFによる世界金融支配の仕組みとなっている。一連の金融危機の中で、銀行の債務を国家に肩代わりさせ、財政赤字（米

国を含む）を背負わせ、国家を呑み込みながら、金融権力が肥大化してきた。諸国を借金づけにして、金融植民地化する、そのキーワードは「負債の罠 Debt Trap」であり、国際銀行家の方策は、人も地方自治体もコミュニティも国家も、すべて借金（赤字国債を含む）を背負わせ続ける。宋によれば、国際銀行家が「影の銀行システム」の各機関はもちろん、米国のウォール街と英国シティの主要金融機関を実質的に所有する。

1970年代のオイルショックも、それに先立つ1973年のビルダーバーグ会議で石油の4倍値上げ戦略が事前説明されていた。ウイリアム・イングドールの『ロックフェラーの完全支配—ジオポリティックス（石油・戦争）篇—』などの調査に詳しい。

1935年のF・D・ルーズベルトの銀行法は、マネー・トラストの利益にとって重要な法案であった。この法律は連邦準備制度理事会の役員任期を14年、つまり大統領任期の3.5倍の長さに延長した。新大統領が着任する前に採用された金融政策は、次の大統領の希望に関係なく継続される。さらにこの銀行法には、連邦準備銀行があげた利益は、政府ではなく、連邦準備銀行に帰属させるという、マネー・トラストが歓喜する規定まであった。イングドールによれば、1990年代から21世紀に及んだデリバティブ、証券化革命で中心的な役割を果たした銀行は、1913年のマネー・トラストの中核にいた銀行と同じだった。ニューヨーク連銀の株主には、JPモルガン、シティグループ、保険のAIGと共に、DTC（デポジトリートラスト社）も名前を連ねていた。DTCはニューヨークに拠点を置き、100カ国以上の地方債・社債など、評価額にして36兆ドル以上を保管する、世界金融の中心であり、現在では世界最大の証券保管・振替の会社である。

3. 脆弱なサイバー社会の崩壊に備えよ

会社を経営するのは役員会だという考え方は、共産中国では現実には起こらない。リチャード・マグレガーは、『中国共産党—支配者たちの秘密の世界—』でこう分析している。中国人銀行家によれば、具体的経営については役員会で討議されるが、役員人事と経営を握るのは党である。企業

は民間所有が当たり前という幻想の世界で投資すれば、日本は国ごと足元をすくわれるであろう。フェイスブックのサーバーは、今や、中国で作られている。サーバーのプログラムの中に、トラップドア（抜け穴）やトロイの木馬のコードを数行書き込むことにより、ある特定の状況下で、サーバーの機能を停止させ、情報を外部に漏洩させたりできる。中国共産党は、企業機密である OS のソースコードの提供をビル・ゲイツに認めさせた。シスコは中国国内に生産工場を持っていたが、複数の中国企業が世界中でシスコ社の模造ルーターを激安で売りまくった。FBI の報告書では、模造ルーターが外国の諜報機関に悪用された場合、ネットワークの麻痺や暗号化システムの弱体化の重大な危険性があると警告する。海外からの破壊活動がいつでも来る、高度 IT ネットワーク社会の脆弱な断崖上に私たちは生活している。海外からのサイバー攻撃などによる日本の生活インフラの破壊で、政府や自治体中枢が一時的に混乱しても、各コミュニティが自給自足・地産地消し、肅々と生存する方策を練っておく必要がある。

(アメリカス学会会員)

ヌエバ・エスパーニャ境界地域テハスから眺めた メキシコ独立運動 (1810～1813)

二瓶 マリ子

メキシコのテレビやラジオで「メキシコ独立運動」が話題にのぼるとき、それは、宗主国スペインからメキシコが一つの国家として独立する、というように、メキシコ全域がひとつに団結した運動として想定されている。しかし、近年の研究成果が示すように、メキシコ独立運動の特徴として指摘しなければならないのは、それが全国的なものとして 11 年間、継続的かつシステムティックに進んだのではなく、メキシコ北部や南部といったメキシコ・シティからは比較的遠いプロビンシアの各地で、断続的・局地的に、そしてなかば無計画的にすすんだということである。

もちろん、21 世紀の現時点から独立運動を眺めたとき、当時、地方で断続的に発生した複数の蜂起を、ひとつの直線的 (linear) な「独立運動」

として——つまり「点」の集まりを「線」として——みることは可能であろう。しかし、当時の反乱を直線的なものとして認識することには、疑問が残る。なぜなら、Eric Van Young (2001) が指摘しているように、当時蜂起した人びとの半分以上はインディオであり、全員がくスペインからの独立という政治的な意図を最初から持ち、反乱軍に加わったわけではなかったからである。多くの場合彼らは、自民族の生活様式の変化や地方経済の悪化、ブルボン改革以降の中央集権化、といったことに不満を抱いていた。そして、独立といった政治的イデオロギーには欠ける、民族文化的 (ethnocultural)、個人的な不満が動機となって mal gobierno や gachupin に反対する反乱軍の活動に加わっていった。

つまり、メキシコ独立運動は、極めて地域性が強く、反乱軍に加わった人びとの動機も千差万別であったといえる。そのため、副王領内陸部で特に活発であった反乱軍の動きだけに焦点を当てて、独立運動の展開過程を考察することには、限界があるといえよう。当時、イデオロギー的にも、民族文化的にも、社会階層の点でも、多様な人びとが存在した、そして現在の米国よりも広大な領土を有していたメキシコで、全体をまとめて独立運動を率いることの可能な政治的リーダーは存在しなかったのである。そのため、メキシコの独立運動を考察する場合、それぞれの地域で起こった反乱に焦点を当てることが重要である。

これを踏まえ、本報告では、ヌエバ・エスパーニャ最北東部に位置した境界地域テハスにおいて、1810～1812年に発生した独立運動を検討した。具体的には、ラス・カサスの反乱(1811年)とグティエレス・デ・ララの反乱(1812～1813)である。前者の反乱は、スペインからの独立、という明確な目標はない反乱であった。それに対し後者は、テハスがヌエバ・エスパーニャに帰属する領土であり、この領土がスペインのみならず米国からも独立している、ということをも主張した運動であった。このグティエレス・デ・ララの反乱は、米国と境界を接するテハスに特有の独立運動であった。

(東京大学大学院博士課程)

お知らせ

天理大学アメリカス学会は、きたる 11 月 24 日(土) 13:00 から天理大学研究棟 3 階第 1 会議室において、「第 17 回年次大会」を開催します。大会当日、学会誌『アメリカス研究』第 17 号を会員のみなさまに配布させていただく予定であります。お楽しみにご来場ください。なお、大会プログラムは次のとおりです。

<総会> 13:00 ~

<研究報告> 14:00 ~ 15:00

梅谷昭範(天理大学附属天理参考館学芸員)
「移民と伝道—天理参考館所蔵の天理教海外伝道資料とペルー移民史料—」

<記念講演> 15:15 ~ 16:45

野崎京子(京都産業大学名誉教授)
「ザ パーソナル イズ ヒストリー わたしの日系人強制収容研究」

記念講演をしていただく野崎京子先生は、幼少期に日系アメリカ人強制収容を体験されました。お父様は「危険な敵性外国人」として家族とは別の抑留所に監禁されていました。戦後、お父様の帰国に伴い来日され、その後大学を出るまで日本で過ごし、大学院は UC バークレーというユニークな経歴の持ち主でいらっしゃいます。歴史的な事件を研究対象とされていますが、ご自身がその事件の体験者です。野崎先生とお父様のライフストーリーがご自身の研究と交わるあたりのお話をお聞きできるものと思います。なお、ご著書『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』(世界思想社、2007 年)は、その記憶(証言)を歴史として記録した貴重な歴史書です。

かつて、『昭和史』(岩波書店、1955 年)にたいし「人間が描かれていない」との批判から「昭和史論争」と呼ばれる歴史叙述をめぐる大論争が

ありましたが、「言語論的転回」をへた今も歴史学徒を悩ませる歴史記述のよきお手本となるでしょう。また、当ニューズレターの春号(66 号)に巻頭言をいただいておりますので、あらかじめお読みいただいでご来場されることをお勧めいたします。もっといろいろなお話を聴かせていただきたいという気持ちが高まります。もはや当学会は「日系アメリカ人強制収容」研究のメッカと化した観があります。ご堪能ください。

編集後記

本学会評議員(元天理大学教授)の古川博巳先生が 9 月 15 日ご逝去されました。つねに、虐げられし者の声に耳を傾け、アフリカ系アメリカ人の文学を研究・紹介されてこられました。ご冥福をお祈りさせていただくとともに、困難な時代にあって夢を失わないよう、キング牧師の言葉をかみしめたいと思います。

“I say to you today, my friends, so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream.”

◇当学会の年会費は一般会員は、5,000 円です(入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年 1 口 3 万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 67 : 2012 年 11 月 1 日発行)

発行者: 片倉 充造

〒 632 - 8510 天理市杣之内町 1050

天理大学国際学部外国語学科英米語専攻内

天理大学アメリカス学会

電話: 0743-63-9076

Fax: 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/